田の神様に感謝する理由

中　正道

聞き手・木地睦　酒市拓弥（石川県立能登高等学校２年）

自己紹介

名前は、中正道。昭和 26 年 11 月３日生まれ、61 歳です。次男坊は結婚して羽咋に住んでいます。今、家に住んでいるのは４人で、私達夫婦と長男と三男です。私の家は、植物公園に来るまでにある小さな集落、段々田んぼのある狭いところやね。今年の３月まで県の職員でして、３月で退職。４月から珠洲農林事務所ってあるんだけど、農業法人などで、農業の研修を希望する人のお手伝いしたりとか、もとの仕事を合わせてやっています。

あえのこととは…

〝あえのこと〟ってのはね、〝あえ〟は田の神様をおもてなしするっていう方言みたいなものですね。〝こと〟は、神事とか物事っていう意味で、〝あえのこと〟っていう名前になってますね。

田の神様というのは、作物を無事に収穫でき、田を守る神様に見立てて、収穫が済んだら大変お世話になってるという事で、家に来てもらってご馳走したりします。暮れのあえのことでは、田の神様と無事に採れたことに感謝する。それから、春の送りの時には、「また今年も家族が食べられる米が採れますように」という祈りとかね。そういう感謝と祈りの神事が〝あえのこと〟かな。

あえのことをしている様子

お米が採れることに感謝

お米って、昔から日本人の食べ物やね。今はいろんな食べ物があって、パンとかラーメンとかたくさんあるけど、100年ほど前の人は、ほとんどお米で栄養を摂ったんやろうね。たくさん食べて。他に肉もそんなに無いし。もちろん、うどんやそば、パンもそんなに無いから、米が無かったら生きてはいけない時代なもんで、米が採れるってことが有り難いし、自然災害が無く採れたってことで、感謝するっていうような意味合いがあったと思っています。

お米を食べた昔、食べない今

今なら、簡単に米とか食べたり他の物も食べられるけど、昔は必ず米を食べたでしょう。米の入ってる袋が１つ30kgなんだけども、今１人あたりのお米の食べる量は、１年間で２つしか食べないんです。60kgいかない。ちょっと切るぐらい。インターネットとかで見ると60kgとか出てくるけど、60kg切ってる位なんです。60kgって米袋２つぐらいで、昔の１俵なんです。昔はそれを２つ、120kg食べた。江戸時代ぐらいには、もっと多くて2.5俵で米袋５つ分、150kgぐらいを１人平均食べていたんですね。今は、2.5分の１ぐらいに減っている。生きるためにというか、仕事をするためにその米から栄養を摂っていたっていう事なんです。

私の家もね、あえのことはもう私だけで30数年やっているし、その親もやってたし、そのまた爺ちゃんもやっている。分かるだけでも、100年近くはあえのことを続けてるんですけど。自分の憶えているだけで、50年は確実に経ってる。

食料難

今、食べる物たくさんあるけど、いつか食料が外国から入ってこなくなったら、日本人、大パニックになるよ。だから、自分たちで食料を生産する。自分の国や地域とかね、国で生産するってことも大変大事なことなんで。今から15～16年前、日本でも干ばつで米がちょっとは減ったんかな。それでも十分あるんやけど、２年続けてちょっと少なかったから、パニックになってタイとか東南アジアからどんどん米輸入したんや。

あえのことを昔は、自分たちの家族の食べる分だけでも採れるようにお祈りしたりしたんやけどね。広く言えば、自分の国の食料は自分たちでできるだけ作るべきやな、という意味も含めて、そんなことにも繋がるかなぁと。昔の人が苦労したことを思ってあげて、大事にまた繋いでいけばいいかな。そういう気持ちであえのことを思っています。

もっそう飯

昔、自分が農家で不作でも米を年貢として持っていかれたでしょう。お米作ってるのに、十分に食べられないことがたくさんあったんやね。輪島市では役人に見つからないような奥山に田んぼをみんなで作って、そこでとれた米を真夜中にこっそり食べるという、もっそう飯という行事もあるんです。山盛りにして、お椀に盛って食べるというものがあるんですけど、あえのこともね、ちょっとそういうところがありまして。自分でお米作ってるのに十分に食べられないという事で、あえのことのご馳走をてんこ盛りにして、これをお供えして、下げた時、家族で必ず食べたんです。白いご飯が平生（へいぜい）食べれないから、このあえのことを利用して、家族にご飯をたくさん食べさせる一つの理由を付けたんじゃないかなぁって思っているんですけど。そういう意味合いを持って、昔の人がよく考えた一つの知恵かなぁって気がしてるんです。

千枚田は昔の人の苦労の形

「幾何学模様で綺麗だ！」って言って、ライトアップやってるけど、それはそれでいいんやけど、千枚田はそんなんじゃなくて、なんとかして米をつくるために、生きるために自分達の土木技術を駆使して作った田んぼなんやろね。平地で作れば楽な仕事を大変な思いして、それが前は千何百枚とか2,000枚とかあって。今は1,000枚程しかないけど。千枚田を「綺麗だろ？」って感じでなく、先人とか先祖が生きるために「こうやってでも田んぼ作ったんだよ」というようなことも一言添えて説明して欲しいですね。

お供え物　×お酒　○甘酒

お供え物は家によって、例えば野菜で採れなかったものがあればちょっと違うこともあるけど、ほとんど一緒ですね。甘酒だけど、最近復活させた人もいて普通のお酒を出す人もいるんですよ。酒は普通なら辛いって言い方するよね。田の神様は辛い物は苦手だから、甘い物でそろえるようにやってたんだけど。復活させた人が最近いろんな事をして、お祭り料理に合わせたりとかしてるなと思って。どれが正しいかって、家々によって違うって話だけど、理屈が合わないなぁというものは植物公園の実演では除いてもらいました。

縁起の悪い物

お供え物には、焼き物がないんです。食べるならお魚焼い

（左上）あえのことで出されるご飯
（上）あえのことで出される甘酒
（右）焼いていない魚をお供えしている
（左下）春のあえのことでお供えされる鱈の子付け

た方が美味しいのに、昔の人は、「干ばつになる」とか、「水不足で田が焼けるに繋がる」とか縁起の悪い物は避けて焼き物は一切使わない。また、酢のもの、「なます」ってあるんだけど、魚を入れる場合があるんだけどそれも焼かない。それから蒸しものを作る料理、例えば「赤飯」「茶碗蒸し」。蒸すっていうのはね、稲の病気に繋がるんです。稲熱病（いもちびょう）と言ってジメジメするような時は、病気や害虫で作物の生長が悪くなる。だから「茶椀蒸し」とかはまずあり得ない。能登ブームとかで復元した家で茶碗蒸しが並んでたり、お酒が並んでたりしている。それは農家にしたらおかしいと思うんだよね。

中さんの好きな供え物

暮れのあえのことの時よりも、春のあえのことの料理の方が楽しみやった。春のあえのこと、2月9日ってちょうど鱈の時期やがいね。鱈汁いっぱい食べられたし、刺身が鱈の子付けやったしね。値段が高い時は、雄か雌のどっちか1匹安い方とか、切り身を買ってきて鱈子だけ別に買うこともあったけどね。

田の神様

田の神様はもともと目が不自由で、あの掛軸と同じとは限らないんやけど、私の家では田んぼを守って一緒に仕事してくれる夫婦神。一生懸命働いたり、実際に仕事してみればわかるんだけど、田んぼの草取りの時、昔は田植え済んで1か月後とか、それから何日後とかに田の草とりしたんやね。栄養とられるから、そん時の稲の高さがね、ちょうど目に刺さるんよ。それから、稲穂で目を突くって人もいるんだけど、籾の先にある「のげ」という刺みたいのがある。それで目を痛めたとか。とにかく、田の仕事を一生懸命やって目を少し悪くしたと言われています。

家によって片目が不自由とか、両目が見えないとか、両目が全体に見えにくいとかなってるけど、うちは片目、それが右目か左目か全然わからないんですよ。片目が見にくくて歩きにくいという神様になっています。だから、田んぼにお迎えに行って家に連れてくる時には「ここには石段がありますよ」とか「気を付けてください」というように案内します。どっかの家ではね、田んぼに迎いに行っておんぶしてくるって家もあったような話を聞いたことがあったな。

田の神様の掛け軸です。こんなイメージです。

あえのことの現状

基本的には、一軒一軒各家ごとでやる。昭和50年代ぐら

いの調査で旧柳田村が一番あえのことをしているという調査があって、だんだんやる人も減ってきたもんで、「じゃあこれは大事な文化だから残そう」ということで、旧柳田村では早くから植物公園で実際にやって見せました。それが、２～３年前にユネスコに申請して登録されました。平成23年に、植物公園で実演をやってた方が亡くなられたもんで、急遽私になったんです。

私は、家では立派なものじゃないけど、似たような感じでやってきてます。うちの近所でもね、してる人はやはりいるんよ。お隣さんもちゃんとしてるし。逆に植物公園で実演するようになったら、「同じ地内だから辞めた」とか「植物公園でやってくれるからいいや」って人もいてね。私よりちょっと年上の人は、お父さんが死んだらやめてる。しっかり本に書いたりメモとかないんで、ポックリ死なれたら「何していいかわからん…」みたいな感じでやめていったんじゃないかな。そういうの多いんです。だから、見よう見まねでお祭り御膳みたいにして、また、晩酌の肴ような感じだけやっている人が近所でも多くて、本来のでやっているのは少なくなったね。ただ、やっぱり大事だから残そうということで、集落や公民館でやるとこも出てきたということかな。

中さんのあえのこと

田んぼから家まで案内する時に、うちは羽織袴もしてない、普通の格好でやってるんですけど。夜の９時や10時頃植物公園の入口の歩道歩いとったら、きっと不審者で通報されるんで、車で田んぼまで行って「田の神様。車に乗ってね」って言って車に乗せて来たりとかね。やり方をきちんと知っていれば、逆に手を抜いてもいいわけやね。「今年はちょっと遅くなったから甘酒は間に合わなかったな」とか、付けるのは知ってるけど「今年は勘弁してね」とか。最近は意味をちゃんと理解してる人はやっぱり少なくなってきてる。

中さんのプライド

小さい時は皆さんも同じで意味わからないと思うけどね。「なんか食べられるな～」ってぐらいやけど、成人になって大きくなってわかることもあり、自分も農業関係の仕事もしてるし、田んぼ作ってるし、「自分だけの力じゃできない。だからこういう行事があったんやろな」とわかってきた。皆どんどんやめてくし、「これはやめたらいかん」とか「親父が死んだからやめたってのはみっともないな」とかね、そんな感じのとこからも始まったり、動機と言えばそういうはっきりしたものはない。

中さんがあえのことをやる意味

ユネスコ無形文化財に登録されて、世界って言ったら大袈裟になるし日本でもいいんだけど「広くちゃんと認識され

植物公園の実演で羽織袴を着てあえのことをする中さん

たな」という感じですね。今まであんまり表に出てなくて。学者さんによれば、奇祭っていうか奇妙な奇抜なお祭りみたいな言い方する学者さんもいたりしたんだけども、そうじゃなくて、きちんとした儀礼をわきまえた感謝の行事だということが認められたってことで、嬉しいですね。正式に日本とか世界とかに認められたって事で意義があるなと思っているね。

【参考文献】私の家の「あえのこと」　中正道著　平成 25 年 2 月 1 日

PROFILE

中　正道　なか　まさみち

昭和26年11月3日生・61 歳
公益財団法人いしかわ農業人材機構
コーディネーター

県の職員を務めていたが、昨年の３月で退職。４月から珠洲農林事務所にて、農業の研修を希望する人のお手伝いなどを行っている。あえのことを通して、現在、多くの農家が抱えている、農作業の機械化・稲作経営の大規模化、米価の低迷で農業者や農家の数が減少していくことを心配し、文化の大切さや田を守ることや、自然の恵みに感謝する農家の心をいつまでも忘れないように、多くの方々に伝えている。

● 取材を終えての感想 ●

私は、初めて聞き書きに参加しました。今回、あえのことの取材に行って中さんから話を聞くまで一つもあえのことを知りませんでした。しかし、中さんの話を聞いてあえのことがどんな行事かを知ることができました。そして、内容をまとめていくうちに、あえのことや田の神様への感謝の気持ちの大切さが分かったり、中さんが引き継いだ思いが伝わってきました。そのことを、この冊子にたくさん載せることができたので良かったです。

中さんはたくさん話してくれる人だったので、取材を終えてからの書き起こしの作業はとても大変でした。その後の作業も大変でしたが、遣り甲斐があって少し楽しかったです。

これからは、お米の大切さや食べられることへの感謝の気持ちを忘れずにしたいと思います。

（木地睦　写真：左）

僕は聞き書きをやってみて、全然参加することができませんでした。どうしたら良いのか良く分らず、聞き書きというのは、こんなに大変なこととは思いませんでした。パートナーの木地君は早く終わって、僕の方は、ボイスレコーダーの聞き取りが全然できず、足手まといになってしまいました。そのあと、パソコンで入力したのですが、それもまた、大変な作業でした。入力することが苦手だったので、とても疲れました。それでも、研修では自己紹介や交流会があり、他校の生徒達と仲良くなれたことが楽しかったです。今終わってみて、気持ちは半分半分です。（酒市拓弥　写真：右）